

研究報告：秋田大学医学部保健学科紀要12(2)：145-151, 2004

新生児・乳児モデルを使用した小児看護学演習による 対象理解の導入としての効果

糠 塚 亜紀子 平 元 泉

要 旨

本研究は新生児・乳児モデルを使用した小児看護学演習において、学生が新生児および乳児をどのようにイメージしたかを明らかにし、対象理解の導入としての効果を検討することを目的とした。短期大学看護学科2年生67名を対象に、小児の養護の演習終了後の感想をデータとし、質的・帰納的に分析した。結果、【小児看護技術の特徴】、【子どもの特性】、【感想・課題】、【愛着】、【養育者への思い】のカテゴリが得られた。【小児看護技術の特徴】が最も多く記述され、演習は学生にとって技術習得の意味が大きかった。【子どもの特性】では、子どもの成長発達上の特徴を示す内容が記述され、学生は子どもの特性を具体的にイメージできた。【愛着】、【養育者への思い】では、学生は子どもに対する愛着を喚起し、養育者へも思いを及ぼしていることから、子どもとその家族も含めて、看護対象の理解を深めたと思われる。以上より、モデルを使用することは、子どもの早期イメージ化をはかり、対象理解の導入としても有効な教授方法であることが示唆された。

I. はじめに

小児看護学技術演習において、教員は様々な教授方法を検討しているが、新生児・乳児を対象とするものではモデルを使用しているのが現状である。モデルを使用した小児看護技術演習では、実際に子どもの看護場面を想定して演習を行い、子どもの日常生活援助の実践に必要な基礎看護技術演習の習得ができることを目指しており¹⁾、臨床実習への導入として、モデルを使用した学内演習の意義は大きいと思われる。しかし、実際の子どもの反応を予測し、特徴を理解するには限界があり、技術の手順等がインプットされるだけで、援助技術の意味づけは実感できず、感覚の統合や相互作用はおこらないといわれている²⁾³⁾⁴⁾。しかしながら、子どもと接する機会が少なくなっている昨今、学生にとってモデルを使用する演習は、子どもの存在を認知し、子どもの像を思い浮かべるよい機会となりえる。そして、看護対象である子どもを具体的にイメージし、学習意欲を高めることができる教授方法ではな

いかと考える。そこで、初めての小児看護学技術演習における学生の子どもに対するイメージ化を明らかにし、対象理解の導入としての効果を検討したので報告する。

II. 研究目的

1. 新生児・乳児モデルを使用した小児看護学演習において、学生が新生児および乳児をどのようにイメージしたかを明らかにする。
2. 新生児・乳児モデルを使用した小児看護学演習の対象理解の導入としての効果を検討する。

III. 研究方法

1. 対象

小児の養護の演習を実施したA短期大学看護学科2年生77名に対し、成績評価終了後、研究の趣旨、参加方法、プライバシー保護、自由参加の権利について説明し、同意が得られた67名を対象とした。

2. データ収集方法および分析方法

演習終了後に学生が小児の養護を実施した感想を自由記述したレポートをデータとした。1人の学生の記述した内容が単一要素になるように文脈を区切り、要約し、それを1件とした。分析は質的・帰納的に行い、記述内容の類似性・異質性に基づき分類し、分類したものに含まれる類似性について表現し、カテゴリ化した。分析の各段階において、研究者間で同様の見解が得られるまで内容を検討し、分析の信頼性、妥当性の確保に努めた。

3. 小児看護学演習の概要

小児保健1単位(30時間)のうち、単元「小児の栄養」6時間、「小児の養護」6時間の講義終了後、調乳および小児の養護の技術演習を設定している。小児の養護の演習項目は、だっこ・おんぶ、衣服の着脱、おむつ交換、ベッドの取り扱いである。演習目標は、1.小児を具体的にイメージし特徴を理解できる、2.小児の日常生活の援助技術を習得する、3.小児の安全安楽を考慮して養護する必要性を理解できる、4.小児の養

護技術を保護者への指導に活用できることであった。演習の方法は、はじめに教員が各項目についてデモンストレーションを行った後、学生が各項目を新生児・乳児モデルを使い実施した。

IV. 結 果

313件の記述が抽出され、5つのカテゴリが得られた。その5つのカテゴリは、【小児看護技術の特徴】148件(47.3%)、【子どもの特性】60件(19.2%)、【感想・課題】が56件(17.9%)、【愛着】27件(8.6%)、【養育者への思い】22件(7.0%)であった。各カテゴリの記述内容は以下のとおりであった。

【小児看護技術の特徴】は、小児看護特有の観察点や留意点および根拠に関する気づきや学びを示す記述であった。このカテゴリはさらに10項目に分類できた。各項目の内容は、記述件数の多い順に以下のとおりである(表1)。「観察の必要性と留意点」は、表情、顔色、皮膚、発汗、冷感、泣き声の観察が大切、子どものサインを見逃さない、看護師の気づきが大切などの

表1 各カテゴリの記述状況【小児看護技術の特徴】

項目	記述例	記述件数(%)
観察の必要性と留意点	・表情、顔色、皮膚、発汗、冷感、泣き声の観察が大切である ・赤ちゃんのサインを見逃さないことが重要である	34(23.0)
安全への配慮	・安全を考えて実施しなければならない ・周囲の危険なものを確認する	33(22.3)
アタッチメント、コミュニケーション	・あやしながら実施する ・愛情をもって接する	14(9.4)
根拠を理解する必要性	・成長・発達を理解する必要がある ・原理・原則を踏まえたケアが必要である	13(8.8)
保温に留意した迅速な援助	・保温に気をつけずばやく援助する ・時間がかかると不快な気持ちにさせてしまう	12(8.1)
成長発達に合わせた援助	・その子の時期に合った物品の選択や援助が大切である ・健やかに成長できるよう援助していく必要がある	11(7.4)
養護の必要性	・ちょっとしたことにも気配りが必要である ・全てにおいてケアが必要である	10(6.8)
安楽の必要性	・安楽への配慮が必要である ・児に負担をかけない	8(5.4)
看護技術の熟練の必要性	・高い技術が必要である ・基礎看護技術の応用である	8(5.4)
清潔、感染予防	・感染に注意し清潔を保つ	5(3.4)

表2 各カテゴリの記述状況【子どもの特性】

項目	記述例	記述件数(%)
モデルとの相違	・実際の赤ちゃんは動いたり泣いたりするだろう ・人形は反応がない	18(30.0)
苦痛を表現できない	・乳幼児は苦痛を言葉で表現することができない ・赤ちゃんは言葉を話せない	13(21.7)
大きさ、重さ	・乳児は思ったより重い ・新生児は小さい	9(15.0)
危険を回避できない	・乳幼児は自ら危険を回避することができない ・大人と違いけがをしやすい	7(11.7)
抵抗力が弱い	・乳幼児は抵抗力が弱い ・赤ちゃんは自分では清潔は保てない	6(10.0)
関節の不安定	・首が不安定である	3(5.0)
成長・発達	・児の成長は急速である	3(5.0)
活発	・児は活発である	1(1.6)

記述からなり、観察ポイントや観察の重要性を示す内容であった。[安全への配慮]は、安全を考えた実施、危険物の除去、股関節脱臼予防、転落防止などの記述からなり、安全確保と事故防止、環境整備、さらに関節可動域の注意等を示す内容であった。[アタッチメント、コミュニケーション]は、あやす、愛情をもって接する、声かけ、目線など、接し方やコミュニケーション技術に関する内容であった。[根拠を理解する必要性]は、成長・発達を理解する必要性、養護の知識を持つ必要性、援助の根拠など、成長発達など小児の看護に関する知識を持ち、根拠のある看護の必要性に関する内容であった。[保温に留意した迅速な援助]は、すばやい援助、物品の準備、確認、手順など、保温に留意した準備と実施に関する内容であった。[成長発達に合わせた援助]は、個々の子どもに合った援助の必要性、物品の選択、成長の促進、定額前後を考慮した援助など、対象に応じて援助を選択し、成長発達を促進する必要性に関する内容であった。[養護の必要性]は、心配りの必要性、守られるべき存在、すべてにおいてケアが必要など、小児は養護の対象であることを踏まえた看護に関する内容であった。[安楽の必要性]は安楽への配慮、負担をかけない、苦痛を与えないなど、安楽に留意する必要性を示す内容であった。[看護技術の熟練の必要性]は、確実な看護技術が必要など、小児看護は確実で熟練された技術が必要であるという内容であった。

【子どもの特性】は、モデルを通して、実際の子ども

の特徴を具体的に思い浮かべ、理解し、表現した記述であった。このカテゴリはさらに8項目に分類できた。各項目の内容は、記述件数の多い順に以下のとおりである(表2)。[モデルとの相違]は、実際の子どもは動く、泣く、嫌がる、人形は無反応、思い通りにできるなど、モデルと実際の子どものギャップを想像している内容であった。[苦痛を表現できない]は、苦痛を言葉で表現できない、新生児は言葉を話ることができないなど、子どもの言語表現能力の不確立に関する内容であった。[大きさ、重さ]は、思ったより重い、乳児は重い、新生児は小さい、頭が大きいなど、子どもの重量、大きさ、体型に関する内容であった。[危険を回避できない]は、子どもは自ら危険を回避できない、けがをしやすい、事故が起きやすいなど、危険の認知、回避能力の不足を示す内容であった。[抵抗力が弱い]は、子どもは抵抗力が弱い、自ら清潔を保てないという、抵抗力不足や清潔保持の困難を示す内容であった。

【感想・課題】は、演習を行った実感、実施の成否、今後の実習への意欲や学習課題を示す記述であった。このカテゴリはさらに以下の3項目に分類できた(表3)。[課題]は、復習が必要、確実にできるようにしたい、今後実習や子どもと接するときに生かしたいなど、今後の実習や実生活における学生自身の学習課題に関連する内容であった。[感想]は、戸惑った、時間がかかった、楽しかったなど、演習の際の不安や戸惑い、素直な実感を示す内容であった。[経験]は、

表3 各カテゴリの記述状況【感想・課題】

項目	記述例	記述件数(%)
課題	・確実に技術を習得したい ・今後の人生に生かしたい	21(37.5)
感想	・時間がかかった ・楽しかった	19(33.9)
経験	・初めての体験だった ・子供の世話をしたことがあるのでなんなくできた	16(28.6)

表4 各カテゴリの記述状況【愛着】

項目	記述例	記述件数(%)
かわいい	・人形でも赤ちゃんはかわいい ・実際の赤ちゃんはもっとかわいいだろう	17(63.0)
愛情、思いやり	・自然と声をかけたくなる ・赤ちゃんを見ていると笑顔になる	10(37.0)

表5 各カテゴリの記述状況【養育者への思い】

項目	記述例	記述件数(%)
育児の実感	・子育ての大変さがわかった ・育児は手間がかかる	12(54.5)
養育者への配慮	・育児の負担を軽減できたらいい ・母親にきちんとした技術と知識を指導したい	6(27.3)
自身の母親への尊敬	・育児をしてきた自分の母親に感謝する	4(18.2)

初めての経験だった、乳幼児と触れ合う機会がなかった、子どもの世話の経験があったのでスムーズにできたなど、子どもと関わった経験の有無や経験の効果を示す内容であった。

【愛着】は、モデルを通じて実際の子どものかわいらしさを感じとり、愛情や思いやりの気持ちを表現している記述であった。このカテゴリはさらに以下の3項目に分類できた(表4)。「かわいい」は、人形でも新生児はかわいい、実際はもっとかわいいだろうなど、子どもがかわいいという感情表現であった。「愛情、思いやり」は、自然と声をかけたくなる、新生児を見ていると笑顔になる、大切にしたい、いとおしいなど、学生自身の子どもに対する愛情の情動、すなわち母性愛を表現している内容であった。

【養育者への思い】は、演習を通して、擬似的に育児体験をし、育児の大変さを実感した結果、養育者へ

の援助や配慮を示し、さらには自身の母親への尊敬や感謝を感じ取っている内容であった。このカテゴリはさらに以下の3項目に分類できた(表5)。「育児の実感」は、育児は大変、育児は手間がかかる、育児は疲れるなど、育児の大変さを実感した内容であった。「養育者への配慮」は、育児の負担を軽減できたらいい、母親に助言、指導ができるようになりたいなど、養育者の育児への配慮や、養育者への看護に関する内容であった。「自身の母親への尊敬」は、育児をしてきた自身の母親に感謝する、尊敬するなど、自身の母親への尊敬を示す内容であった。

V. 考 察

モデルを使用した演習によって技術の準備や手順を確認することは、実践的な関心を高め、技術の基礎を習得することが可能であり、効果的な学習方法である

ことは先行研究等ですでに明らかである⁹⁾。そこで今回は技術習得や講義と実習の統合をはかる目的だけでなく、学生が子どもを具体的にイメージ化する目的としてもモデルを使用した演習は効果があるのかを明らかにすることに注目した。そして、演習終了後の学生の感想を分析した結果、【小児看護技術の特徴】、【子どもの特性】、【感想・課題】、【愛着】、【養育者への思い】の5つのカテゴリが得られた。

【小児看護技術の特徴】は、小児看護特有の観察点や留意点および根拠に関する気づきや学びを示す記述であった。技術習得に関する内容であり、演習目標と照らし合わせても演習の効果として予測された結果である。このカテゴリが最も多い記述数だったことは、学生にとって演習は技術習得の意味が大きかったと考えられる。また、カテゴリ内の記述の約半数を「観察の必要性と留意点」23.0%と「安全への配慮」22.3%の2つの項目が占めた。この結果は、学生は小児看護学技術演習において、「安全への配慮・事故防止」⁶⁾、「観察と安全への配慮」⁷⁾を学んだという研究結果と一致する。その他の項目も子どもを援助するときの具体的なかかわり方や留意点を示すものである。学生はこれらを単にテクニックとしてとらえているのではなく、子どもの特性をイメージし、理解した上で、基礎看護技術を発展させ、小児看護技術の特徴を習得しようとしていると考える。学生は根拠をもった観察をすることが子どもの安全につながり、看護師には熟練した技術が要求されていると感じていると思われる。

【子どもの特性】は、モデルを通して、実際の子どもの特徴を具体的に思い浮かべて表現した記述であった。小児看護学技術演習において学生は「小児の特性を理解して援助する必要性」⁷⁾、「乳児の特徴や表現の意味を理解し、成長する存在としてとらえることが養育者として大切であること」⁸⁾を学んだという研究結果と類似する。このカテゴリの項目である「大きさ、重さ」、「関節の不安定」、「抵抗力が弱い」、「活発」、「成長・発達」は、子どもの身体的形態や機能上の発達の特徴を示している。また、「苦痛を表現できない」、「危険を回避できない」は、子どもの精神・運動機能上の特徴を示している。学生はモデルを使った演習によって、講義で得た知識と統合して、身体的機能、知的機能、情緒・社会性の全般にわたる子どもの成長発達に関する特徴をとらえて、具体的にイメージし、表現できたと考える。また、このカテゴリ内では、「モデルとの相違」が30%を占め、学生はモデルと実際の子どもを比較して認識している。小児看護臨床実習において、泣く、動くなど人形とは違う反応をする患児に対して苦労した体験を持つ学生も存在する⁸⁾が、演

習にリアリティを求めるのは難しい現状である。一方、実習において学生は、看護師や教員の患児との関わり方のモデルを見たり、患児からよい反応を得られる体験があると、実習の困難さを軽減させるという報告がある⁹⁾。したがって、演習での介入よりも、実習にて教員やスタッフが、モデルの提示や助言をしていくことがギャップを埋めるのに効果的なのではないかと考える。

【感想・課題】は、演習全体に対する抽象的表現ではあるが、実習や学習への意欲の高まりを示すものであった。演習は臨床実習への意欲を高め、講義へのフィードバックの動機付けとなっていると思われる。また、「経験」の項目が抽出されたことより、実生活で子どもとかかわった経験が、少なからず援助の実施に影響していると考えられる。

【愛着】は、モデルを通じて実際の子どものかわいらしさを感じとり、愛情や思いやりの気持ちを表現している記述であり、いずれも子どもに対する肯定的感情であった。「かわいい」は、素直な感情であり、「愛情、思いやり」は、学生自身の母性愛を表現している内容であった。学生の母性愛の表出が、モデルによっても促進されることは興味深い。看護学生は、子どもに対して肯定的なイメージを持つといわれている¹⁰⁾。河上ら¹¹⁾は、看護学生は子どもに対して「好き」という感情が強く、また「苦手意識」が低くなり、接触体験が増えるにつれ、子どものイメージを多方面からとらえることができるようになったと報告した。今回モデルを使用した演習が、子どもとの接触の擬似体験となり、愛着という肯定的感情を持ったことで、子どもの特性等のイメージが描き出され、子どもを多面的にとらえる一助となったのではないかと考える。このような演習は、学生の母性意識、つまり、子どもが「かわいい」、「好き」、「庇護したい」などと思う気持ち¹²⁾の表出や、人間性の発達を促すことにも効果的なのではないかと思われる。

【養育者への思い】は、演習を通じた擬似的育児体験により、学生自身が育児困難を感じた結果、養育者への援助の必要性を感じて配慮を示し、さらには自身の母親を尊敬し、感謝している内容であった。学生は子どもの特性を理解できたため、モデルを使った短時間の演習でも育児の大変さを実感した。一方で愛着をもつこともできた。その2つを引き寄せて育児が大変だったにもかかわらず、愛情を持って育ててくれた自身の母親に感謝することができたのだと考える。さらに、自身の母親を尊敬できたことは、子どもだけでなく、子どもの養育者も含めて看護対象ととらえ、共感できる素地が得られたと考えられる。その結果、「養

育者への配慮]として、子どもの家族に対する援助の必要性を理解できたと考える。モデルを使用した演習により、子どもの親に対する共感から援助の行動化へ発展させていくことも可能なのではないだろうか。

以上のカテゴリ間の関連から【子どもの特性】をとらえることは、【小児看護技術の特徴】の理解につながると同時に、学生の【愛着】を喚起して情緒発達を促し、【養育者への思い】にまで考えを及ばせ、看護対象としての理解を深めたと推測される。つまり【子どもの特性】をとらえることは、小児看護学の学習の基盤となっていると考えられる。

技術演習は、子どもにかかわる体験の少ない学生が演習することによって、その状況をイメージし、自分で取り組むことができるようになるのを助けるという意味がある¹⁾。本研究においても、対象理解の導入として、小児看護学演習にモデルを使用することは、子どもの早期イメージ化をはかる学習目的としても有効な教授方法であることが示唆された。

今後は、学生が対象を理解するための効果的な教授方法について、さらに検討を重ねることが必要である。

VI. 結 論

1. 新生児・乳児モデルを使用した小児看護学演習は、学生が小児看護技術の特徴を理解し、子どもの特性をイメージできると同時に、愛着や養育者への思いを感じとることもできた。

2. 新生児・乳児モデルを使用した小児看護学演習は、子どもの早期イメージ化をはかり、対象理解の導入として、有効な教授方法であることが示唆された。

文 献

- 1) 中林雅子, 平井るり・他: 実習準備としての演習モデル. *Quality Nursing* 8 (9) : 71-77, 2002
- 2) 片田範子: 小児看護での学内実習のすすめ方. *看護教育* 30 (5) : 258-261, 1989
- 3) 兼松百合子: 小児看護における学内実習論. *看護教育* 30 (5) : 262-267, 1989
- 4) 成島澄子: 小児看護の学内実習のあり方—対象の抽象と具体を統合する視点から—. *看護教育* 30 (5) : 284-288, 1989
- 5) 山村美枝, 飯村直子・他: 看護系大学における小児看護学の技術演習の実態と今後の展望. *Quality Nursing* 4(7) : 47-50, 1998
- 6) 大木伸子, 出野慶子・他: 小児看護学技術演習における学生の体験と学び—学生のレポート内容の分析より—. *東邦大学医学部看護学科・東邦大学医療技術短期大学紀要* 16 : 47-57, 2002
- 7) 野間口千香穂, 大木伸子・他: 小児看護学技術演習における学生の学び—養育者として大切なこと—. *日本小児看護学会誌* 9 (1) : 52-53, 2000
- 8) 高橋泉, 野中淳子: 小児看護学における技術教育のあり方に関する検討. *日本小児看護学第14回学術集会講演集* : 318-319, 2004
- 9) 山本美佐子, 原沢茂美: 短期大学における小児看護学臨床実習での学生の学び 病棟実習における学習効果の考察. *群馬県立医療短期大学紀要* 4 : 99-111, 1997
- 10) 岩本真紀, 近藤美月: 看護学生の子どものイメージに関する実態調査. *香川医科大学看護学雑誌* 6 (1) : 137-142, 2002
- 11) 河上智香, 藤原千恵子・他: 4年制看護系大学の学生が持つ子どもイメージの構造. 第34回日本看護学会論文集—看護教育— : 103-105, 2003
- 12) 新道幸恵, 和田サヨ子: 母性の心理社会的側面と看護ケア. *医学書院*, 東京, 1990, p99

Images Formed of Neonates and Infants in Child Health Nursing Practice utilizing Neonate and Infant Models

Akiko Nukazuka Izumi Hiramoto

Course of Nursing, School of Health Science, Akita University

The present study aims to determine the images that students form of neonates and infants after completing a course on child health nursing practice utilizing neonate and infant models. Furthermore, the effect as introduction of object understanding is examined. Sixty-seven second-year college nursing students were surveyed after completing the child health nursing practice course, and data were qualitatively and inductively analyzed. The following categories were identified: "characteristics of child health nursing techniques", "characteristics of children", "impressions and topics", "affection" and "concerns for guardians". Content was highest for the category of "characteristics of child health nursing techniques", suggesting that students valued most the nursing techniques taught on the course. The category of "characteristics of children" contained items that were related to the growth and development of children, and enabled the students to form concrete images of children. The categories of "affection" and "concerns for guardians" included items that were related to affection toward children and concerns for their guardians, suggesting that the students gained an understanding of children and their families within the scope of nursing. Taken together, the findings indicate that the use of models for introducing study subjects may be an effective teaching method enabling students to quickly form images of children.